

# 青年期における不登校からの回復プロセスの検討

——友人関係と自尊感情に着目して——

20005FRM 加賀 麻友美

キーワード：不登校・友人関係・自尊感情

## 1. 問題と目的

現在、学校現場ではいじめや不登校など、子どもの学校不適応が深刻な問題となっている。特に、いじめを受けたことによる身体的・精神的な影響は長期にわたることが指摘されおり（坂西，1995）、いじめを受けた経験は否定的である。

しかし、亀田・相良（2011）は、過去にいじめを受けた経験のある大学生を対象に面接調査を実施したところ、重要な他者の支えによって、いじめられた経験を糧に成長できたと感じていることを示した。さらに織田（2018）は、過去の経験を現在の自分の糧になるものとして肯定的に受け止めることができると、自分らしくある感覚が育まれ、自尊感情が高まると述べている。

青年期では、支えてくれる重要な他者として、頼りにでき、心を打ち明け悩みなどを話せるような友人関係が重要な役割を果たすと考えられる。大学生の友人との付き合い方について、加賀（2021）は、悩みなどを打ち明ける、友人との「深い」付き合い方が孤独感を低くすることを示した。

不登校からの回復についての研究が見られる一方で、星野ら（2003）は、不登校児の予後は必ずしも楽観視できず、一部は学校を卒業しても社会に適応できない場合があること、不登校の影響が蔓延化・長期化する可能性もあることを示した。

以上のことから、いじめや不登校からの回復には、その経験を語るができる友人との親密な関係が重要であるといえる。また、経験に肯定的な意味を見出すことで自尊感情が高まり、不登校からの回復につながると考えられる。そして、不登校経験者の友人関係と自尊感情は長期的な視点で考えていく必要があるだろう。

そこで本研究では、過去に不登校経験があり、その後、社会復帰して高校を卒業した青年を対象に、質問紙調査（研究①）と面接調査（研究②）

を実施し、学校不適応状態からの回復過程において、そして高校卒業後に、友人関係と自尊感情がどのように変化し、影響するのかを検討することを目的とする。

## 2. 研究①

(1)目的：現在の友人との付き合い方と自尊感情を検討した。

(2)方法：

調査対象者：高校既卒者で過去に不登校経験のある青年12名に協力を依頼した。

調査方法：Google formにてオンラインアンケート調査を実施した。

質問項目：①フェイスシート。②過去の不登校経験について。③Rosenberg（1965）の自尊感情尺度日本語版：10項目、4件法。Schmitt & Allik（2005）を参考に、25点以上を自尊感情高群、25点未満を自尊感情低群と分類した。④佐藤・落合（1996）の友人とのつきあい方尺度：35項目、4件法。加賀（2021）は、「防衛」、「全方位」、「自己自信」、「相互理解」の4因子を抽出した。さらに、二次因子分析を行い、「相互理解」と「防衛」が「深い—浅い」を、「全方位」が「広い—狭い」を表す因子と解釈し、「深い—浅い」と「広い—狭い」の基準で友人関係を4類型化した。

(3)結果と考察：

自尊感情尺度得点の平均値は、平均25.5（ $SD=7.4$ ）であった。友人との付き合い方尺度において、個人の下位尺度得点を算出し、加賀（2021）の二次因子分析の分類に当てはめて友人関係を4類型化した（Figure 1）。

結果、「広い—深い」付き合い方が自尊感情高群（以下、高群）に、「狭い—浅い」付き合い方が、自尊感情低群（以下、低群）に見られ、「広い—深い」付き合い方が最も適応的であると考えられた。また、「広い—浅い」付き合い方は、高群と

低群に見られた。高群は、自分の肯定感覚を維持するため（小塩，1998）に、低群は、自分に自信がもてず他者からの評価を気にする（亀田，2003）ために、表面的な付き合い方をしていると推測される。そして「狭い—深い」という「深い」付き合い方においても低群に見られ、不登校経験者は「深い」付き合い方をしている者であっても、対人関係に不安を抱いていたり、自尊感情が低い（松浦・岩坂，2011）ことが考えられる。

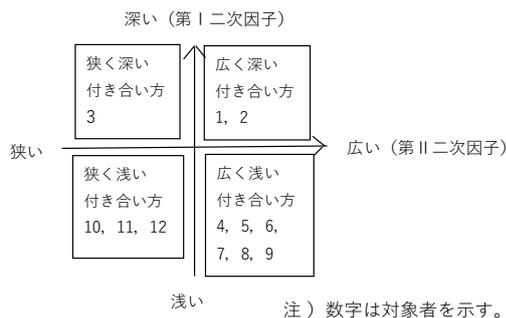


Figure 1. 友人との付き合い方の4類型と対象者分類。

### 3. 研究②

(1)目的：不登校当時と社会復帰している現在、各期における友人との付き合い方、その変化の過程や、社会復帰のきっかけについて調査し、学校不適応状態からの回復のプロセスを検討した。

(2)方法：

調査対象者：研究①と同様であった。

調査方法：アプリケーションソフトのZoomを用いて、オンラインでの半構造化面接を1人1時間半～3時間実施した。場合によっては、2回にわたって実施した。

質問内容：不登校当時から現在までの過程について、及び不登校当時と現在における友人関係と自尊感情について調査した。

分析方法：木下（2003）によって提唱されたM-GTAを用いた。

(3)結果と考察：

不登校からの復帰には、家族や学校からの不登校であることを否定しない関わり方や、子どもの意思を尊重する関わり方が本人にとって肯定的であることが分かった。そして現在、自尊感情高群は、【クラスとの関わり】や【家族との関わり】において不登校当時、より前向きな捉え方をして

いた。しかし現在、自尊感情低群においても、家族からの＜受容的な関わり＞によって、前向きな考え方に变化していた。このような周囲との関わり、本人の気持ちの前向きな変化、新しい環境への進学等の要素が重なって復帰につながっていた。復帰後は、＜休みグセ＞や＜行き渋り＞も見られたが、学校や教師からの配慮が復帰の際に支えになり、自分の意思によって毎日登校できるようになっていた。高校で復帰し、卒業した大多数は、不登校経験を通して＜自身の成長＞、＜視野の広がり＞、＜自身の受け入れ＞ができ、＜経験の受け入れ＞をしていた。しかし、一部は＜大学受験の失敗＞による後悔や、＜再び不登校＞、＜うつ病＞で不登校になった場合もあった。

友人関係において、「広い—深い」は、不登校当時は友人との関わりがない者も見られたが、復帰後の友人との関わりを通して、自信をもつことができ、ありのままの姿を出す付き合い方に变化していた。「狭い—深い」は、不登校をきっかけに、関係が疎遠になっていたが、復帰後は友人を選んで付き合い、現在は、大切にしたいと思える友人を選んで、本音を言い合える関係を築いていた。「広い—浅い」は、普段と変わらずに友人関係があった者と、疎遠になった者が見られた。復帰後から現在においては、＜本音と言えない＞ことから表面的な関係が見られた。「狭い—深い」は不登校当時、関わりがない一方で、友人からの声かけが支えになる者が見られた。復帰後から現在は、＜人に対する不信感＞、＜嫌われたくない＞ことから表面的な関係を築いていた。

### 4. 総合考察

研究①と研究②より、不登校経験者は、家族や学校、友人の支えによって復帰し、毎日登校することや友人との関わりを通して、＜自身の成長＞、＜視野の広がり＞、＜自身の受け入れ＞をしていた。友人関係において、不登校経験者は、不登校当時に感じていた＜本音と言えない＞、＜人に対する不信感＞、＜嫌われたくない＞が影響して、友人と表面的な「浅い」付き合い方を築いていることが推測された。